平成二十九年度

第六十三回青少年読書感想文コンクール

札幌市読書感想文コンクール部門

受賞作品集

小学校・中学校・高等学校

札幌市学校図書館協議会

後援

札幌市

札幌市議会

札幌市教育委員会

札幌市ＰＴＡ協議会

北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部

目次

札幌市長賞　「人間」と「宗教」の関わり　札幌聖心女子学院高等学校　二年　大久保　絵未　1
札幌市議会議長賞　テオの「ありがとう」ノート　札幌市立山の手小学校　六年　野崎　幸子　2
札幌市教育長賞　僕の「何か」を探したい　北嶺中学校　二年　芝木　美昭　3
札幌市学校図書館協議会会長賞1　あきらめない強さ　札幌市立桑園小学校　四年　岡　七海　4
札幌市学校図書館協議会会長賞2　イリュージョンでできた世界　札幌市立新川中学校　三年　佐藤　亮太　5
札幌市学校図書館協議会会長賞3　私の「幸せ」とあなたの「幸せ」　北海道札幌旭丘高等学校　一年　和田　朋夏　6
札幌市PTA協議会会長賞1　みんなのおひさまはらっぱ　札幌市立真駒内桜山小学校　二年　貸谷　珠音　7
札幌市PTA協議会会長賞2　親友　藤女子中学校　二年　梶原　捺　8
札幌市PTA協議会会長賞3　美しいこと　北海道札幌旭丘高等学校　一年　佐藤　美安　9
北海道高等学校PTA連合会石狩支部長賞　九十歳。何がめでたい。　北海道札幌旭丘高等学校　一年　作田　明佳里　10
光陽社賞　アランのははでっかいぞ、こわーいぞを読んで　札幌市立新琴似南小学校　一年　上野　晴南　11
キハラ賞　『光のうつしえ』を読んで　札幌市立西陵中学校　一年　安住　佳穂　12
教育出版賞　「このあとどうしちゃお」を読んで　札幌市立美香保小学校　三年　土肥　顯仁　13
北海教育評論社賞　蟹工船を読んで　札幌聖心女子学院高等学校　二年　竹内　萌乃　14
図書館ネットワークサービス賞1　レシピは残る　札幌市立宮の森小学校　五年　松田　莉奈　15
図書館ネットワークサービス賞2　人間だけじゃない　藤女子中学校　一年　塚本　麻衣　16
光村図書出版賞　傍観者の苦悩　北嶺中学校　三年　山口　泰輝　17

審　査

審査基準

○ 内容や主題を的確に把握し、自分の考えたことや感じたを素直に書いているか。

○ 身近な問題と結びつけて考え、読み手の生活がにじみ出るように書いているか。

○ 表現に工夫のあとが見られるか。（論旨・構想・表現・表記など）具体的な観点として、次の七点がある。

① 作品を十分に読み込んでいるか。

② 作品から受けた感動・発見・喜びなど読み手の心情が表現されているか。

③ 読み手の独特の受け取りが学年相応に表現されているか。

④ 読み手の日常生活や考え方が、どこかににじみ出ているか。

⑤ 本との付き合い、本との出合い、本を手にしたときの喜びなど、本に対する読み手の心がにじみ出ているか。

⑥ 読書生活が日常の中に溶けこんで、自然な姿で読書しているか。

⑦ 文体や語彙を工夫しているか。

○ 本の選択に無理はないか。

○ 応募規定に合っているか。

審査の方法

一　事務局で作品規定に従い整理。応募票は切り離し、作品に学年・対象図書別に通し番号を記す。学校名や氏名は、審査段階で明らかにしない。

二　第一次審査により、第二次審査対象作品を選考。その選考にあたっては、一作品二名以上の審査員により評価し、協議の上決定する。

三　第二次審査では、佳作以上の該当作品を小学校・中学校・高等学校別に審査。担当審査員の協議の上、決定する。

協賛商社（順不同）

毎日新聞社　（株）キハラ　（株）光陽社　教育出版（株）
（株）北海教育評論社　（株）北海教材社
（株）図書館ネットワークサービス
（株）光村図書出版　（株）万博　東京書籍（株）　（株）平和堂
日本出版販売（株）　トーハン（株）　日教販（株）
（株）ダイヤ書房　（株）有伸商会

札幌市長賞

「人間」と「宗教」の関わり

札幌聖心女子学院高等学校　二年　大久保　絵未

この本を読んで、人間についてそして宗教は人間の一部である人格を作るのだということについて考えさせられた。

この物語には神を必要とする人、しない人、信仰を守る人、守らない人、愛を信じる人、信じない人などたくさんの人が登場する。悪魔になり切れない悪人。それが作中で私が最も共感した伊藤清左衛門だ。主人公のキクや清吉よりも彼らを傷つける伊藤に私は同情した。彼は下級役人で、切支丹を拷問し、キクの体を奪い、キクが愛する清吉のために用意したお金を着服する悪人だ。しかし、自分の非道な行いを後悔するなどと、非道な行いをすることを躊躇しない悪魔とは少し違う。伊藤は常になんとも言えない虚しさや卑怯さ、そして苦しみと共に生きているのだ。キクと関わっていくほどに伊藤は自分の汚れた根性を顧みて苦しむ。そして酒におぼれたりもするのだが、心の奥では立派な人間になりたいと思っているのだ。彼の動機で後に大出世していく本藤に言わせてみれば、「人は悪くないのだ。だが、人が悪くないゆえに、この男、生涯陽の当たる道を歩めぬ。」らしい。同じ下級武士の家に生まれたのにもかかわらず、一人は通訳として新しい日本を作るために明るい道を歩み、一人は棄教させるために切支丹達に拷問を与える暗い道を歩む。夢と希望に満ちあふれた心と悲しみや卑怯さ、苦しみで満ちあふれた心。本藤だけでなく、キクや清吉とも伊藤は対比される。作中で人間の暗い部分を伊藤以上に背負っている人物はいない。

浦上の百姓達をも煽動しておきながら、彼らが捕らえられてもノウノウと暮らしている、そしてそのことを心苦しく思っているというプチジャン神父に対して伊藤はきれいごとを言うなという。

「あんたは本藤と同じやっか。世渡りのうまさだけたい。そして絶対自分の手は汚さん。本藤は罪人の一人でも撲ったことはなか。撲れと命じて遠くで見とる。撲るとはこん俺たい…。」

「おまえには撲るもんも辛かことのわからんじゃろ。責苦はわからんじゃろ。」

このセリフを読んで私は伊藤こそ作中で最も人間らしい人間だと思った。疑り深く、もろくて、私利私欲のために生き、しかしそんな自分を好きになれずに本当は真人間になりたいと思っている。自分が人に誇れないようなことをしているのは理解しているのに、どうしたらその苦しみから逃れることができるのかわかっていない。そんな彼にプチジャン神父は神様は本藤ではなく伊藤を愛しているという。伊藤のひがんだ、傷ついた心に神は入り込もうとするのだと。これに対して伊藤は何を馬鹿なことをいっているのかという態度をとる。しかし、この時に自分は誰かに認めてもらいたい、愛されたいのだと、無条件に自分を慈しんでくれる存在を求めているのだと彼は気付いたのではないだろうか。彼にとってのその存在が神だったのだろうか。伊藤は後に洗礼を受け切支丹になる。自分の罪を告白し、生まれ変わろうと行動した彼はとても勇気のある人だと思う。尊敬に値する。

この本を読んで宗教は伊藤の様な悩みを抱えている人にこそ必要なのだと感じた。日本は今でこそ宗教に対して寛容であり、人々の精神の自由を認めている。精神の自由を認めることは多種多様な人格を認めているということだ。宗教は人格形成に影響する。その人の考え方の基礎を作る。だからこそ江戸時代は幕府に対して危険な考えを持たぬように宗教は制限されていたのだろう。私には特別に信仰している宗教はない。しかしそれは、決して宗教を下らないものだと思っているわけではない。宗教はいわばそれを信仰する人の心の支えだ。特定の宗教を信仰しているからといって差別をすることは人格を否定することだ。許されるべきことではない。そう思っているからこそ私は様々な宗教から影響を受け人格を形成しているのだろう。たとえば私は、八百万の神という考え方からものを大切に使おうと心がけている。「汝の敵を愛せ」という教えから争わないためにまず自分から相手を否定することを止めるよう心がけている。

どの宗教にも共通することは、一つは心の支えになること。もう一つは「祈りの力」だ。信者ではないキクが清吉の無事をマリア像に祈ったように、祈りの力は宗教を超えるのだ。良く考えれば共通点や類似点が見つかるはずなのに、宗教を理由にテロ事件や差別がおこることは非常に遺憾だ。自分と異なる宗教を信仰する人を最初からただ否定するのではなく、その人が信仰する宗教について知ろうとすることが大切なのだ。そう行動していけば、宗教に対して正しい倫理感と知識で自分がどの様に行動すれば良いのかが見えるだろう。多くの人がこの様な考え方を念頭に置けば、宗教的差別のない世界が実現するはずだ。

「女の一生」　遠藤　周作・著　新潮社

札幌市議会議長賞

テオの「ありがとう」ノート

札幌市立山の手小学校　六年　野崎　幸子

私の父は、車椅子に乗らないと外出ができない。一人で出来る事も限られているので、家にいるのがほとんど毎日だ。学校で「お父さんて、どんな人」と聞かれると、父が車椅子に乗っている、と話すことにためらう時がある。

テオと父は車椅子に乗っていて、周りの人に手伝ってもらわなければならない生活を送っている。私も手伝いをしているが、時々、面倒くさくなって嫌になる事がある。

父は障害という言葉を受け入れているのだろうか。母が以前、「障害者だと思って生活をしているわけではない。」と父に話をしたと聞いたことがある。母は夕方まで働いているため、三人で旅行に行ったこともない。だから、夏休みの思い出を学校で話す時は、いつもさびしく思っていた。でも父は、いつも私に勉強を教えてくれるし、夏休みの自由研究では立体模型に挑戦した私に幾度となくアドバイスをしてくれた。また友人が困っていれば自分のことのように考え悩んでいる。自分で出来る範囲で精一杯のことをする姿は彼に共通している。体力的には限界があるが、心や知性ではそれがない。テオの父親がそう思うように、私も父が誇らしい。

障害を受け入れていないのは私ではないだろうか。なぜならいつも周りの目ばかり気にして行動していたからだ。私は一番近くにいる家族だからこそ受け入れ、理解しなければならないと思う。「かわいそう」や「大丈夫？」の一言ですませるのではなく互いに理解し合いながら生活していく事が必要だと。

彼や父は、これからずっと障害に向きあっていかなければならない。最初はなんで障害と向きあわなければならないのか、と思っていた彼も、ありがとうノートを作る事で前向きに変化していった。そして彼の心の成長が人とのかかわり方を変える事で前向きに変化していった。

しかし、これからもずっと車椅子の生活を続けると、一生ありがとうを言い続けるのだろうか。いつも何も言わずに手伝ってくれる父を見ていると、私はありがとうを言いたくなった。私は、言われる前にありがとうを言える自分になりたいと思う。

世の中には車椅子の人がたくさんいるだろう。全ての人が彼のような気持ちになれるともかぎらない。どうすればいいのだろうか。それは、周りにいる人達の互いを支え合う気持ちが必要だろう。人は決して一人では生きて行くことができないし、これは障害の有無に関係ないでしょう。私の家族も「三人しかいないんだから」と言っていつも相手をはげましあって生活を送っている。

今度、父にありがとうノートを提案してみようと考えている。最後の一ページになった時、父は一歩前進しているのだろうか。そう思いたい。自らあきらめないかぎり限界は、見えてこない。彼も父も、可能性は未知数だ。

対象図書『テオの「ありがとう」ノート』
クローディーヌ・ル・グイック・ブリエト　ＰＨＰ研究所

札幌市教育長賞

僕の「何か」を探したい

北嶺中学校　二年　芝木　美昭

興味を惹かれて、いわゆる狭く深く、突き詰めてやり遂げたい「何か」。そういう運命の「何か」に出会いたいと強く思う。僕にも、何かすごいことが出来るのではないか。偉人の伝記を読むと感じる、羨ましい気持ちだ。

一方で、一つの「何か」にこだわらず、自分の成長過程や周囲の環境に即した状況で興味を持ったことを、いわゆる広く浅く体験し習得することも、世界的な発見に至らずとも長い人生の中で有用であると僕は思っている。

一般的な偉人伝において、各界の偉人の成功は、各偉人の「何か」に対する探究心と、その「何か」の成就に導く努力の賜物によるものだ。だから君たち読者も自分の「何か」をとことん頑張るのだよ、偉人のように。という筆者からの強いメッセージが伝わってくる。過去に偉人伝を読んだ際に、僕が常に感じた違和感である。幼少のころから生涯をその「何か」に捧げ、実績を称賛される状況に対してだ。僕たち中学生は学校で、豊かな人間性を育むために教養として様々な教科を学習し、学力向上のために努力している。ところが、偉人伝に登場する偉人は幼少の頃は大抵、学校や社会に馴染めない問題児といった設定なのだ。人としての基本的な学びを疎かにして、一つの「何か」に没頭し、それが大発見に繋がれば世界的に称賛され偉人として歴史に名が残ることが、不可解に思えてならない。

しかし、この物語では、自分の人生総てをその「何か」に費やさなくても大丈夫、立派な実績は残せるよ、という筆者からの温かいメッセージが伝わってくる。なぜなら、「数学」に出会い、幕府の財政関係の仕事である御用を第一としながらも、好きな数学の道で成功を収めた関孝和が、苦悩しながら御用と数学をどちらも両立させていた様子が描かれているからだ。偉人伝に対し疑心暗鬼になっていた僕であったが、自分のしなければならないことと、したいこと、そのどちらも大切に考えやり遂げた関孝和が羨ましいと、この物語を読んで素直に思えた。

関孝和の和算の研究に関しては、円周率をはじめ、これを応用した暦学、測量術、多元連立方程式、微分積分の発見など、どれも世界初であると認められている。鎖国中の江戸時代、貿易や文化など他国との交流が難しい状況の中で、日本独自の数学である和算を世界最先端の数学にまで発展させた関孝和。日本が誇る世界的な数学者であったにも関わらず関孝和自身についての記録は、生前の身分や功績以外は残されていないそうだ。僅かな参考資料を駆使して筆者は、関孝和の業績の紹介とともに、その人間関係について詳細に記している。要するに、関孝和の和算における偉大な業績は、本人の既存の数学の問題点を解決したいという強い想いと、そのための惜しまない努力、そしてさらに周囲の人々とのかかわりを含めた、恵まれた環境に起因していることを強調したいのではないかと感じられた。

例えば、学校の授業で育てている朝顔を夏休みに家に持ち帰ったとする。そのまま放置すると、新学期を迎えるころには間違いなく朝顔は枯れ果ててしまっている。美しい大輪の朝顔を開花させるにはまず元気な朝顔の種を栄養分を含んだ良い土に植えて、日当たりのよい場所で水やりを欠かさず行い、適度の肥料を与えて愛情を持って育てなければならない。そして、つるが伸びると、成長を促すために支柱を立てる。そんな、種の能力を引き出すためのたゆまぬ努力により、ある朝、僕たちは立派な大輪の朝顔を目にすることができるのだ。そして、それを観察日記にしっかりと書き留めておかなければならない。種の努力だけでは、大輪の花は咲かないのだ。

つまり、ある分野において、いかに類稀なる才能を持っていたとしても、本人が不断の努力を積み重ねることが可能となるような、良い理解者や協力者の存在など、周囲の環境が整っていなければ、才能の開花（歴史に名を残すような立派な業績を残す事）には到底結びつかない。

ここで、この朝顔の例を関孝和に当てはめてみる。種が数学を探究している関孝和だとすると、土が幼少の頃より武士の子としての教養を身に付けさせるべく関孝和を育ててくれた、兄である内山永貞。水は数学に対する情熱を分かち合え、憧れてもいた香奈。支柱が数学の師匠であった柴村盛之と橋本正数。肥料がライバルであった沢口一之、田中由真。そして観察日記の作成が、関孝和の名を広め、和算を更に発展させた優秀な弟子である建部賢明、賢弘兄弟が担当したといえよう。

僕も、自分が朝顔であるかもしれないし、あるいは今後偉人になる人物の土や水や肥料もしくは支柱になるかもしれない。観察日記を書く立場の人物になっている可能性もある。将来のことは不測だが、いずれの立場になった際にも、自分の持てる力を総動員して取り組み、綺麗な花の開花に携わりたい。

「円周率の謎を追う」　鳴海　風　作　くもん出版

札幌市学校図書館協議会会長賞

あきらめない強さ

札幌市立桑園小学校　四年　岡　七海

「ただいま」返事のない家に学校から帰って来ると、まずテレビのスイッチをつける。お母さんが帰ってくるまで三時間。シーンとした家に一人でいる事がこわいからだ。

お母さんが帰って来ると、学校での事をたくさん聞かれる。弟も保育園での事をたくさん話してくれる。そしてみんなの笑い声が聞こえる。

最近始めたバスケでは、大きな声をかけ合う事、なかまの声を聞く事を毎回教えられる。声やホイッスル、ブザーでじょうきょうを理かいする。

それが私の日じょうである。音のない生活は考えた事がない。初めて考えてみたが想ぞうする事もできない。そんな世界で野球をするとはどういう事だろう、本当に出来るのだろうか、といったぎ問から、この本を選んだ。

ウィリアムは、小さいころに音を失った。お母さん、お父さん、友達…どんな声でどんな調子で話をしているのか分からない。辛いだろうし、かわいそうだと思った。

でもウィリアムは大好きな野球をコツコツと練習をして、メジャーリーガーにまでなった。音がまったく聞こえない中、どうどうとむねをはってプレーするすがたにおどろいた。

私はけんこうな体で、走ったりとんだり話したり何でも出来る。でももしウィリアムのように耳が聞こえなかったら、スポーツをしようと思っただろうか。好きなスポーツがあっても、かげで悪口を言われたり笑われたら、辛いし悲しいし、くやしくて、そして耳が聞こえない事をにくんで言いわけにして、色々な事をすぐあきらめていただろう。

耳が聞こえないのにメジャーリーガーになるというふつうでは考えられない事をなしとげたのは、出来る方ほうを見つける、そしてどんな事があってもあきらめない、そんなすがたが周りの人達を感動させ、動かせたのでないか。

野球のし合を見に行った事がある。野球をして「アウト！」「セーフ」としんぱんのまねをした事もある。まさかその当たり前に使われていることもウィリアムが考えた事であり、またおどろいた。ウィリアムのがんばっているすがたに、周りの人達もどうにかしてあげたい、と思ったのだろう。

引たい後も野球のす晴らしさを伝えつづけるほど大好きな野球をあきらめない事。しょうがいや周りのせいにしないで、出来る方ほうを何とか見つけてがんばるすがた。ウィリアムが語りつがれる理由なのだろう。バスケットでシュートを外した時、思い通りにならなかった時、いつもくやしくてやめてしまいたくなる。でもそんな自分がはずかしくなった。私なんかより、何倍も辛い悲しい思いの中ゆめをゆめをかなえたウィリアム。まだまだ私にはがんばりが足りない。目標に向かって自分のかのうせいを信じて、あきらめずにがんばろう。

ウィリアムから、たくさんのゆうきをもらった。

対象図書「耳の聞こえないメジャーリーガー　ウィリアム・ホイ」

ナンシー・チャーニン・作　斉藤　洋・訳　光村教育図書

札幌市学校図書館協議会会長賞

イリュージョンでできた世界

札幌市立新川中学校　三年　佐藤　亮太

テレビから、こんな話題が流れてきた。恐竜は長いこと、爬虫類に属すると思われてきた。しかし、最近の研究では爬虫類説が崩れ、鳥類に属することが分かってきた。というようなものだった。僕は嬉しくなった。理由は二つ。一つは、進化の末端とも言うべき、小さなセキセイインコが我が家にも一羽いるからだ。しかし、そのうろこ状の足の爪は驚くほど鋭く、恐竜の名残を想像するには十分だ。飼い鳥に思いが広がり嬉しくなった。そしてもう一つの理由。それは、日高先生の言った「世界はイリュージョンでできている」説が実証されたように思えたからだ。

恐竜は爬虫類に属するとえらい学者の筋道の通った説明に、僕は今まで何の疑問すら持ち得なかった。でも爬虫類説は、誰かが創りだしたイリュージョンだった。それが、このニュースで証明された。人は筋が通ると真理だと思ういきものだ。まぼろしをまぼろしではないと思い込むのがイリュージョン。これは、先生の定義だ。先生は、人はイリュージョンだけで世界を構築していると考える。だから、研究界では真理なんてないと思い、新たなイリュージョンをどんどん創り出す。そうすることが、楽しくていいことではないだろうかと思っている。ただ、真理なんてない、などと言われると少々不安になる。でも、新たなイリュージョンを創り出す過程で生まれる、様々な考え方やものの見方こそが、真理やイリュージョンよりむしろ大切な事なのかもしれない。

日高先生の動物行動学者としての原点は、小学校時代にある。先生は身体が弱かった。そのためスパルタ主義の教師からひどくいじめられ、やがて登校拒否児となった。そんな先生が向かった先は、近所の原っぱ。そこで、運命の芋虫に出会う。そして「お前はどこに行くの。」と問いかけた。この何気ない静かな問いかけこそが、動物行動学者日高敏隆誕生の原点となった。

僕なら芋虫を「気持ち悪いなぁ。」と見て見ぬふりをするだろう。一匹の芋虫に人生を左右されるようなことは、まずないと思う。それが日高先生ときたら、まるで原っぱで幼い子供にでも出会ったように問いかける。しかし、虫はもちろん答えない。では、なぜ答えない相手と知っていて問いかけるのか。答えは、とてもシンプルだ。返事はなくとも、見て気が付くことがあるからだ。わかるとかわいくなる。そして、うれしくなる。ただそれだけのために問いかけを続ける。先生は、このときに湧き出る嬉しさが、生きるうえでとても大切なことだと考えているようだ。生きることへの共感は、そうやって生まれてくるものだよ、と。しかし、この時点ではまだ先生のうれしさの本質的なものが、僕にはよく理解できなかった。

花が咲き始めると蝶が飛ぶ。モンシロチョウは、低いところを飛ぶ。でも、アゲハなどのいいチョウは高いところしか飛ばない。「なぜ」だろう。先生はチョウを見て、こんな「なぜ」を考える。そして、その疑問をチョウに問い続ける。

この単純な話が、先生と僕との生き物に対する思考起点の違いを示している。僕の考え方は、僕が主体で会って、チョウの立場に立ってみることはない。これは、無意識にチョウを自分より下とみているからだと思う。先生は、中学二年生の時にユクスキュルという生物学者の「いきものはみな、客観的な環境ではなく、それぞれが主体となって、そのいきものにとって意味のある独自の環世界の中に生きている。」という話に共感したと言っている。しかし同時に、こんなのは当たり前のことだと思ったらしい。しかし、僕にはとても衝撃的な言葉だった。僕の中で、地球というフィールド上では、人類みな兄弟感覚が頭の片隅にあった。そして人は複雑な思考と行動を理論立てて構築することができる分、この世界を最たる者だと感覚的に思っていた。でも、環世界は一つ一つ、それぞれに完成されている。自分達に必要な能力は、自分が生きる環世界の中でだけひるようなもので、隣の環世界に生きるものには、全く意味を持たないものだったのだ。こんな簡単な事にも気づかずにいた僕は、どれだけ自分主体の世界で生きてきたかということになる。でも、そのことを僕は恥じない。「何かが違っているという気がしたら修正しながら歩いていけばいい」と、先生は教えてくれた。

現在、地球をめぐる自然生活環境はすさまじいスピードで変化し続けている。僕達、人も含め生き物はみな、そんな中を種別も世代も性別も関係なく、なんとか適応し、生きていかなければならない。同じ時を、同じ星のもと生きている生き物同士。互いに認め合い共感し合って嬉しさを分かち合えたら、厳しい環境の中でも互いに豊かな生き方ができるのではないだろうか。

「世界をこんなふうに見てごらん」　日高　敏隆　著　集英社文庫

札幌市学校図書館協議会会長賞

私の「幸せ」とあなたの「幸せ」

札幌旭丘高等学校　一年　和田　朋夏

「幸せ」のカタチとは一体なんだろう。私にとっての「幸せ」は、家族や友達と同じ時間を共有することだ。こう答える人は少なくないはず、むしろ多いはずだ。では、その多くの人が「幸せ」だと思う時間が好きではなかったり、苦痛と感じる人は果たして「幸せ」ではないのか。

私が読んだ『人間失格』は、太宰治が生涯で最後に書き上げた本だ。この本が発行された年に作者が自殺を図ったことから、太宰治の遺書とも言われている。

この物語は大庭葉藏という一人の青年の一生を描いたものである。葉藏はとても裕福な家庭に生まれ、美しい容姿にも恵まれたが、幼い時から空腹という感覚や他人の苦しみや幸せを全く理解できないのだ。

「自分は普通ではない。」

幼い葉藏はそう思った。そんな自分を隠すため道化、いわゆるピエロのようになった。他人を喜ばせたり、楽しませたり。もちろん人を欺き続ける自分に好意を持たれても喜ぶことが出来ず、ただ自分の振る舞いが嘘だとバレれば怒られるという恐怖にかられるばかりだった。不安になればなるほど孤独を感じていくようになった葉藏。だがよく考えてみてほしい。このような不安に悩まされながら、こんなに幼い子供がボロひとつ出さず、ピエロのように演じているなんて、どう考えても普通ではない。自分に悲しくならないんだろうか。つらくはならないんだろうか。本当に強い子供だったんだと思う。

上京して高校に入学した葉藏は画学生の堀木と出会う。堀木は葉藏に「酒・煙草・淫売婦・左翼思想」を教えた。このことが葉藏を落胆させるきっかけとなったのだ。

その後高校を退学となり、家からも追い出され、女の家に居候しながら酒や煙草に溺れる日々が続いていた。そんな中、今度は京橋のバアを営むマダムの元を押しかけた。マダムもバアの客も優しく、葉藏の世間への恐怖も薄れていったある日、バアの向かいの煙草やの娘であるヨシ子に惹かれ、結婚することを決めたのだ。だがヨシ子との結婚生活を送るうちに、ヨシ子は商人の男に騙されてしまう。これを機に人を疑うことを知らず信頼の天才と呼ばれていたヨシ子は、その真っ白な心を失い、夫の葉藏にまで気を遣うようになる。そんな妻の姿にショックを隠しきれない葉藏は心に空いた穴を埋めるかのように、酒、そしてついに麻薬にも溺れる。やがては葉藏は精神状態に異常をきたした人が行く脳病院に連れて行かれたのだ。

「自分は狂人、人間失格なんだ。」

と悟った。

私はきっと、葉藏の人間に対する恐怖心を理解することは出来ないだろう。誰しも一度は人前で猫を被ったことがあると思う。私も高校へ入学した当初、誰とも話すことが出来なく、変に目立たないようにおとなしく装っていた。だがそれは自分を隠すためではない。嫌われたくないから、好かれたいからだ。周りの人からの評価を常に気にし、良いように思われたいというのが大半の人間が思うことだ。葉藏のように、他人からどう思われたいるかを気にせずに生きていければとても楽なんだろうと思う。だが逆にそのことに恐怖を感じていた幼い葉藏に恐怖を感じさえする。

一体どうすれば葉藏はその恐怖から解放されることが出来るのだろうか。本当に信頼出来る人に出会えば、葉藏も恐怖から抜け出せることが出来たのではないかと私は考える。

「自分は人間に恐怖を持っている、そんな自分を隠すために道化している、人に好かれても喜ぶことが出来ず、ましてや他人の気持ちを理解出来ない。そう、自分は人とは違うんだ。」という心の叫びを全て話せる相手が葉藏には必要だったのではないか。私もなかなか人に言うことが出来ず自分の中で溜め込んでしまい、自分の中で悩みが一人では処理出来ないほどの大きさになることだってある。そんな状況でも誰かに打ち明けることで、解決したり楽になることが出来る。人と共有し、痛みを分かってくれるような相手が葉藏にもしいれば、少しか自分に自信が持てるようになってちたかもしれない。

では、葉藏は「幸せ」ではなかったのか。世間の人からすると、本当の自分を出せず常に本当の自分を隠し続けるというのは「幸せ」とはほど遠いのかもしれない。だがそんなのは所詮、私達の偏見でしかない。「幸せ」のカタチは、それぞれ自分で決めるものだ。自分が幸せだと思えば「幸せ」なんだろうし、幸せではないと思えば幸せではない。だからその自分の概念を押し付けてはいけないのだ。葉藏が「幸せ」だったのか幸せではなかったのかは、本人以外には分からない。だが常に普通とは違う自分の姿を誰にも知られず、自分の望み通り生き切った葉藏は「幸せ」だったのではないかというのが、私の偏見だ。

「人間失格」　太宰　治　著　集英社文庫

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

『みんなのおひさまはらっぱ』

札幌市立真駒内桜山小学校　二年　貸谷　珠音

この本には、わたしみたいな女の子、みつこちゃんがでてきます。わたしは四月生まれで、ようち園のほしぐみの中で一ばん大きかったところが同じです。

森やのはらには、みつこちゃんのほかにもぐりとぐら、うさぎやくま、三つ子のこぶたなどいろいろなどうぶつがあつまってきます。みつこちゃんも人なのにどうぶつとおはなしができるのがいいなぁ、と思います。

わたしは学校にいくときに、犬やカラスを見るとドキドキしてにげ出したくなります。でも、

「おはよう、わんちゃん。」

「おはよう、たまちゃん。いってらっしゃい。」

と、もしお話ができたらうれしい気もちになれるからです。

それから、冬に雪がいっぱいふった日のお話があります。

きょ年の冬休み、さっぽろも雪がどっさりふったことがありました。おばあちゃんのおうちの雪かきをお手つだいしたときに大きな山ができて、わたしとおねえちゃんはすべりだいやひみつきちをつくったりしてあそびました。雪かきは、さいしょとおわりのほうに、すこしがんばりました。『ゆきだるま』のお話に出てくる男の子も、たくさん雪あそびをしたあと、これから雪かきをがんばるんだと思います。

わたしたちが雪かきをしたあとに、おうちであたたかいミルクを出してくれたおじいちゃんは、三月に天ごくにおでかけしてしまったので、もうしゃしんでしか会えません。

わたしは、おひさまはらっぱにはいつもだれかがいるから、たのしいときにわらったり、こまったときにいっしょに考えたりできるんだとかんじました。

だから、これからはじぶんでバスにのれるようになって、おばあちゃんのおうちにたくさん通いたいです。そこは、みんながあつまるおひさまはらっぱで、楽しくおしゃべりしたり、あそんでいるところを、おじいちゃんがおひさまになって見ていてくれたらいいなぁと思います。

対象図書「おひさまはらっぱ」　中川李枝子・作　山脇百合子・絵　福音館書店

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

親友

藤女子中学校　二年　梶原　捺

「傷ついていたのは僕なんだ。」

この一文に、ぼんやりと本を読んでいた私の脳に電流が走ったような気がした。急に頭の中が真っ白になって、ここまでのあらすじも、自分が何を考えていたのかも忘れてしまった。私は、ぼんやりと読むのをやめ、じっくりと一文一文を理解していくようにしてもう一度読み直してみた。

その一文のある場面は、主人公のコペルの心が大きく動く貴重な場面である。コペルと、親友のユージンがお互いの思いをぶつけあい、その中で様々な発見をしていく。その発見が、やがて二人の絆を深めていくことになる。

小さいころからの親友の絆はとても頑丈だ。遠くに離れたり、なかなか会えなかったりして二人のつながりが細い糸になったとしても、なかなかちぎれないだろう。コペルとユージンの絆は、ぶつかり合い、複雑にからみ合うことでだんだん頑丈になっていくのだ。

コペルとユージンは親友だ。しかし、ユージンは小学校六年生頃からずっと学校に来ていない。また、ユージンはまだ十四歳なのにもかかわらず、一人暮らしをしている。コペルはつらい思いをしているユージンのために自分は何ができるだろうと考え、親友を励まそうと努力した。いろいろ試みたが、親友にその強い想いはなかなか伝わらず、コペルの心の中は悲しい気持ちでいっぱいになった。

もし、自分がコペルだったらどう思うだろう。きっと私はコペルと同様に親友を励まそうとすると思う。これは、私とコペルに限ったことではない。面白い話をしたり、一緒に料理をしたり、精一杯何かしようとするのは、人間のもつ思いやりだと思う。その思いやりを裏切られたコペルは、とてもつらかったはずだ。しかし、つらかったのはコペルだけなのだろうか。

私には、「ずっと仲良しだよね。」と誓い合った友人がいた。何年も前に、その友人は「世界で一番好きな人は誰？」と私に尋ねた。私は、「もちろんあなただよ。」と言ったのに、その友人は、「私は、お母さんが一番好き。」と言った。予想外の答えに、幼かった私はひどくショックを受けた。そして、「大嫌い」といってその友人と話さなくなった。

今考えると、ずっと共に暮らしている母の存在より、自分の存在がはるかに小さいことは理解できる。でも、それは今落ち着いているから分かることであって、突然予想外のことを言われるとパニックになるのは当たり前だ。それも、私は「大嫌い」という言葉を何も考えずに言ったことを後悔している。そして、何年も経った今でも、自分の軽はずみな言動によって相手がどれほど傷ついたか考えることがある。でも、いくら後悔しても過失を変えることは出来ない。そう思うと、自分が裏切ったということは紛れもない事実なんだと心が重くなる。

きっと、ユージンも同じ気持ちだったのだろう。

でも、過去から学べることは多いはずだ。私にとってその友人とのつらい思い出は、今の友人との良好な関係をつくる上で大きな支えとなっている。それは、もう二度とあんな思いはしたくないという強い気持ちが、私の心の中にあるからだと思う。もし、過去を変えられるのならば、この一瞬を大切にしようとは思わない。繰り返されることのない「今」を無駄にしないよう、同じ過ちはしたくない。

私がこう考えられるのも、あの友人がいたからだと思うと、人間が群れを成して生きている意味が分かったような気がする。独りでは一人分のものの見方しかないけれど、群れを成していることによってものの見方がいくつにも増える。その見方は同じであることもあるけれど違うこともある。そのときに、自分と相手の見方の違いを受け止め、最終的な答えを導き出す。その導き出された答えが、自分の人生をより豊かにするための材料となるはずだ。

コペルとユージンでは、ユージンの方が寂しい生活をしている。親がいない一人暮らしだ。でも、私はユージンが不幸だとは思わない。なぜなら、ユージンは群れの中にいるからである。むしろ、コペルという親友がいて、ユージンはどれほど幸せなのだろうか。たとえ、ユージンが寂しい生活をしていたとしても、ユージンの心の中は豊かなはずだ。

「僕は、そして僕たちはどう生きるか。」この問を、私の友人の住人に聞いて、何人が答えられるだろうか。私は、誰一人として答えることができないと思う。なぜなら、日々の生活の中でそんなことは滅多に考えないからである。でも、様々な事を経験していくと、その答えは見えてくるのではないだろうか。コペルとユージンは、激しくぶつかりあってやっと気付いた。やっぱり僕らには親友が必要だと。私の答えはいつ見つかるのだろう。

「僕は、そして僕たちはどう生きるか」　梨木　香歩　著　理論社

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

美しいこと

札幌旭丘高等学校　一年　佐藤　美安

かつて、美しさは一つの参考でしかなかった。しかし今や、美しさは金を生む。商品としての価値を手に入れたのである。橘玲氏は著書「言ってはいけない―残酷すぎる真実―」のなかで、経済学者ダニエル・ハマーメッシュの研究を基に、美人と不美人の経済格差は三六〇〇万円であると明記している。資本主義社会の日本において、「顔より中身」という言葉は信憑性を失いつつあるのだ。では、不美人は必死に化粧を学ぶしかないというのか？

「美容整形」という手段がある。莫大な金をかけて莫大なリスクを負い、美しさを手にする方法である。百田尚樹氏の「モンスター」に登場する女性、鈴原未帆は美容整形によって絶世の美を手に入れた。整形という行為は他人の共感を得ることが難しい。鈴原未帆の容姿をからかい、いじめ続けた同僚は、彼女が整形したことをはっきりと否定している。

「いくら美しくなっても、本当の鼻じゃないわ。元々は違う鼻じゃない。」

鈴原未帆は、こう答えている。

「元々って何なの？じゃあ昔は綺麗だったおばあさんが、私はもともとは美人だったって言って歩いてるの。昔はどうだったって関係ないわ。今どうなのかが大事なのよ。」

整形は道徳的ではないと考える人も多い。「正直に生きる」「人を見た眼で判断するな」それが義務教育の課程で習う道徳、つまり「正義」だからである。私も「親にもらった顔を傷つけるなんておかしい」と思っていた。だが違った。整形をしている人間は、顔に傷をつけているのではなく、元々傷物の顔を普通の顔に治そうとしているだけなのだ。十五年の人生で、私は美しさが人にどのような影響を与えるのかということを知った。美しさを大切にするのは大人ばかりではない。小学生のときクラスで流行った花一匁で一番に名前を呼ばれていた女の子は確かにかわいかったし、男に振られてばかりの女の子は心ない「ブス」という言葉に傷ついて泣いていた。人は小さなころから審美眼を磨きはじめる。美人と不美人のイラストを子どもに見せると、四歳児では六割半ば、七歳児ではほぼ一〇〇パーセントが正しく美醜を判断できるという。

人は無意識のうちに美しいものに好意を抱き、醜いものを嫌悪する。鈴原未帆は畸形的なまでに醜かった。クラスメートはおろか家族にさえ疎まれ、蔑まれ、嘲られた。彼女のあだ名は「バケモン」。しかし彼女は金をつくって整形を重ね、絶世の美女に変身を遂げた。かつて哀れみと嫌悪の眼差しを向けられていた彼女は、生まれて初めて羨望の眼差しを知ったのである。

この世に生まれた不美人は、一度は願う。「もう少し美しく生まれてきたのなら」と。人は美しさの価値を知っている。だから化粧をし、エステに通い、きれいな服やアクセサリーで自らを飾りつける。美しくあることに囚われて、鏡を見つめてはため息をつく。美容整形は非常に合理的な手段であると言えるだろう。整形は落ちない化粧である。二重をつくるアイテープも、必死な小顔マッサージも、不自然なつけまつげもいらない。誰もが美しくなれる可能性がこの世には存在している。ある程度のリスクをともなって。

美容整形に伴うリスクは医療ミスだけではない。周囲の人間が整形に対して否定的だった場合、それまで築いた関係を失うことも考えられる。結婚する事、子どもを産むことも難しくなるだろう。不美人の自撮りを嘲笑い、美人を讃える世の中は、実は整形にも反発的だ。失う覚悟をもつ人間が美容整形をすればいい。不美人でも満足できるなら、成形する必要などどこにもない。極端な話、ナルシスティックな勘違い不美人に、勘違いだと伝えなくても良いだろう。知らないところで笑われている不美人に現実を教えて二重の苦しみを味わわせるのは酷だ。本人は幸せなのだから。だがこれは極論であって、大半の人間は自らの容姿に多かれ少なかれコンプレックスを抱いている。その中に、すべてを失うかもしれないという覚悟をもって美容整形をするような人間が何人いるというのか。決して多くはないだろう。鈴原未帆もある意味では極論、特異な例であるかもしれない。彼女はあまりにも醜かったが故に、はじめから何ももっていなかった。失うものなど一つもなかったのだから。しかし私は彼女に自己を、そして美しくなりたいと願う不美人たちを投影せずにはいられない。この世の人間は美意識から逃れることはできない。「モンスター」は鈴原未帆の下剋上の物語である。だが、主人公は彼女ではない。この世に生きる、すべてのブスの物語である。

「モンスター」　百田　尚樹　著　幻冬舎

北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞

九十歳。何がめでたい。

札幌旭丘高等学校　一年　作田　明佳里

九十歳。日本の平均寿命を軽く超えているこの年齢はとてもすごいものだ。作者は御年九十三歳。こんなにも長生きなのはなんともめでたいことだ。しかし作者は「ナニがめでてえ！」と思っているらしい。

なぜめでたくないのか。不思議に思った私はこの本を手に取り、読んでみた。すると、作者の長生きだからこその苦労と、現代社会への不満や批判（まあ、ほとんどがそれなのだが）が多く記されていた。

「なぜか私は声が大きい。その上よくしゃべる。」作者は自分自身についてこう述べている。元気があって良いことではないか。もちろんこう思った。しかし作者は、

そのため他人は私を元気なばあさんだと思い込む。九十を過ぎて何が困るといってこれが一番困るのだ。（中略）散々働いてきたのだ、身体の方々にガタがきているんです、というのだが、なかなか信じてもらえない。

とこう言う。たしかに九十歳を越えているのだから身体にガタがくるのは当たり前である。そう考えると、声が大きくてよくしゃべるのは元気なことだと思い込んでしかった自分がなんだか恥ずかしくなった。また、何だか申し訳ないような気がした。

しかし、深く読み進めていくうちに、身体は元気ではなくても、力強く生きているのだということが分かった。現代社会の現状に対して怒りが込み上がるらしく、それが力強さの原動力なのか、怒りの叫びが本から飛び出て聞こえて来るような気がした。作者は新聞の「人生相談」の愛読者である。その相談の中にこんなものがあった。「連れている犬が道端でウンコをした。通りかかった親爺が文句をいった！」そのせいで、「いやな思いが離れず、気持ちがざわついて、なかなか消えない。」という四十代の奥さんの相談だ。作者は「それだけのことじゃないか。」とあきれていた。私も作者の気持ちと同じだった。こんな小さなことで何で悩むのだろうと思った。また、こんな相談もあったらしい。

三十代のパート女性。（中略）展覧会が開かれることになったので、友人たちに声をかけて、当日は来てくれるのを待った。だが当日、家族も友人知己誰一人来なかった。（中略）それ以来落ち込んで空しくなり、絵は押し入れにしまったままにしている……

作者としては「来るというのに一人も来なかった。ソレが何なんです？」と思らしいが、私としては最初から、行けないとはっきり言うか、連絡の一つでも欲しいと思ってしまう。作者に共感できるところもあるが、やはり現代っ子の私には他の相談などでも作者がなぜ怒ったりするのかよく分からなくなることもあった。しかし昔の新聞の「人生相談」では、夫の浮気や横暴、姑の無理解、意地悪男に騙された、処女を奪われたなどというものだったらしい。私はとても驚いた。こんなにもつらい（生きていくのも苦しくなるほどつらい）ものだったのかと。しかし、それらの回答もまた残酷なものだった。たいていが我慢、忍従を説くものであったのである。それが出来ずに苦しんでいるから相談しているのに、そんな回答では意味がないのではないか、と思ってしまった。しかし、昔は男社会で不平等、理不尽の中に女性がいた。だからこそ、昔は「本当の」人生相談があったのだと思った。そう考えると、今の人生相談は本当に相談と言えるのだろうかと思ってしまう。作者もそう思い、怒っていたのだろう。だが、これは平和になり、何の不足もない平穏な暮らしの中で、悩んで考え込む必要がなくなり、強さも自立心も何も生まれなくなってしまったせいであるらしい。平和とは一見、良いもののように思えるが、人々から強く生き抜く力を奪ってしまったのだと分かった。当たり前だと思っていた何もない静けさが、だんだんと恐いもののように感じた。

この作者、佐藤藍子さんは長生きであるが故、多くのものを見て、聞いて、感じてきた。その佐藤さんが感じる不満や批判、怒りには大きな意味が込められているのではないかと思った。この本には現代の、自分の利益ばかり求めるようになった世の中や、すべて合理的に処理しようとする社会、そして平和によって力強さを失った人々などたくさんの怒りが込められている。私はこれから、文明の進歩を追い求めすぎず、古きよき生き方も尊重して暮らしていきたい。

「九十歳。何がめでたい」　佐藤　愛子　著　小学館

光陽社賞

アランのははでっかいぞこわーいぞをよんで

札幌市立新琴似南小学校　一年　上野　晴南

「あー、びびったー。」

わたしがほいくえんのとき、ともだちやわたしによこからパンチのマネをして、びびらせてよろこぶ男の子がいたよ。わたしは、よわい子いじめをされるきもちで、やめてほしかった。カエルやサルやオウムもアランにこわがらせられて、いやでおなじきもちだったとおもうよ。

こわがらせをするアランのいればがなくなって、みんなはもうこわがらせができないからいいきもちだったとおもうし、アランのことをわらってやりかえしをした。だけどわたしはやりかえしをしたらだめだとおもうよ。なぜならおたがいやりあったち、だれもとめられなくて、なかよしになれないからだよ。いやだったほうからちょくせつじぶんのきもちをあいてにいったらよかったとおもうよ。

カエルやサルやオウムは、さいしょはアランのこまったきもちにきづかなかったけど、アランがないたらみんなアランのきもちをわかってくれたよ。みんなやさしいね。そうして、アランがみんなのためにできることをおしえてあげたよ。アランはみんながおしえてくれたことをまもったからうまれかわったよ。はのみがきかたをおしえたり、かみをきってあげたり、みんなのやくにたつことばかりしたよ。

わたしは、うまれかわったアランのほうがかっこいいとおもいます。さいしょはまちがっていたけれど、みんなのはなしをよくきいて、「ぼくはそれをやればいいんだ。」ときづけるところがかっこいいです。わたしは、アランみたいにすなおなときもあるけど、すなおじゃないときもあります。まちがってるといわれるとくやしかったり、はずかしいきもちがわいてくるからです。ほんとうにまちがっているときは人のはなしをちゃんときいて、アランみたいにやりなおしていけば、いいじぶんになっていくとおもいます。

対象図書「アランの歯はでっかいぞこわーいぞ」

ジャーヴィス・作　青山　南・訳　ＢＬ出版

キハラ賞

『光のうつしえ』を読んで

札幌市立西陵中学校　一年　安住　佳穂

私は新聞で、安倍首相が核兵器禁止条約に不参加を表明したニュースを読みました。私は、どの国よりも強い意志表示で核兵器禁止条約に参加してほしいと思いました。なぜなら、七十二年前の広島や長崎のように原子爆弾によって一瞬で何もかもが焼け、だれもが悲しむ悲惨な状態が二度と起きてほしくないからです。それは、日本だけでなく、世界中のどの国でも同じです。ですから、日本には、ぜひ、核兵器禁止条約に参加してほしいです。

私はちょうど、この二ュースを読んだ後に、この本に出合いました。この本は、原子爆弾被爆二世の子供達が身近な人に原爆のことを聞き、それを絵に描きながら、原爆について考えていく物語です。

私は、曾祖父を原爆で亡くしました。この話ほど私にとって曾祖父や原爆は近い関係ではありませんが、曾祖母や祖父を通して長い悲しみや苦しみを少し聞いてきました。もし、私もその時代に生きていたならば、原爆の話になるたびに悲しく苦しい思いをしなければならなかったでしょう。あるいは自分が戦争の犠牲者になっていたかもしれません。この本に出てくる登場人物もこのような思いをしたのだと思うと、平和であることがどれだけ幸せなことかを深く教えさせられます。

この本には、ある言葉が二度出てきます。それは、「よく知っていると思っている人のことでも実は知らないことが多い」という言葉です。

初めにこの言葉が出てきたのは、被爆二世の子供達が文化祭のテーマを考えていたときです。二世が多いのに親たちから、原爆でどんな被害にあったかなどの話をあまり聞いたことがなかった人が多かったのです。この本に書いてあるように、被爆者が体験したことは想像を絶するようなことで、少し思い出すだけでもつらくなるようなことだったのだと知りました。でも、この苦しくて、悲しかった体験をやっとの思いで話してくださることによって、もう二度と原子爆弾が落ちないでほしいという願いや命を大切にしなければならないという思いを次世代へつなげることができるのだということも、この本を通して知りました。

二回目に同じ言葉が出てきたのは、主人公の希未が、お母さんの流した白い灯籠が気になり、だれのためのものかをつきとめようとしている時でした。灯籠流しとは、人の死を悲しみ、灯籠やお盆のお供え物を海や川に流す行事です。希未はお母さんに、灯籠流しのときに希未に話しかけてきた人はだれか、そして、お母さんの流した白い灯籠は誰のものかを尋ねました。お母さんは、好きだった人が亡くなったことに深い衝撃を受け、言葉に出すだけでもつらかったので今まで希未に伝えられなかったのだと解りました。希未は、自分に知らないことがあり、聞いてみたいという思いもあったが母がこっそり涙を流している様子を見て、聞いてはいけないことなのではないかと少し不安な気持ちになったのではないでしょうか。希未は、お母さんから話を聞いた後、聞く前の不安な気持ちはなくなっていました。そして、つらいことがあったのにいままで笑顔で過ごすように頑張っていた母のことをすごいと感じたと思います。私は、この場面で、とても悲しくなりました。なぜなら、いつも笑顔で過ごしていた人の過去にとても残酷なことがあったんだと思うと、胸がしめつけられる気がしたからです。

この本の最後に希未や吉岡先生達が灯籠を流している場面があります。その時は被爆一世であっても、二世であっても自分のことだけを考えて灯籠を流してはいません。亡くなった人達のことと共に、なぜ原爆が投下され、途方もなく悲しいことが起きたのかということを、その後の世代へ伝えていかなければならないという思いを持ちながら流していました。また、生きている命も大事にしていかなければならないとも考えているのではないでしょうか。

灯籠流しは今でも、ずっと続いています。私達は、過去の原爆投下が自分には関係ないことだと思うのではなく、世界で唯一我が国だけに起こり、大勢の人が亡くなったこの出来事のことを、決して忘れずに次の世代へ伝えていく必要があります。

この本の中で著者が最も伝えたかったことは、今ある命を大事にすることだと思います。今でも外国では戦争で多くの人々が死んでいます。そういう悲しい死が世界から無くなりだれもが幸せに暮らし、平等の命の重さを大切に生きてほしいと筆者は願っていると思います。

この本で、私達人類は二度と原爆の被害者にも加害者にもなってはならないと、再認識できました。

「光のうつしえ」　朽木　祥　著　講談社

教育出版賞

「このあとどうしちゃおう」を読んで

札幌市立美香保小学校　三年　土肥　顕仁

ぼくがこの本をえらんだ理由は、しんだらどうなるのか気になったからです。

「ぼく」はこないだしんじゃったおじいちゃんのベッドの下からノートを見つけました。そのノートは「このあとどうしちゃおう」ノートで、おじいちゃんがしんだらどうなりたいのか、どうしてほしいかがたくさん書いてありました。「ぼく」はおじいちゃんがしぬことについてどう思っていたのかをうーんと考えます。そして「ぼく」もノートを作ろうとしたら、生きているうちにやりたいことがたくさんあることに気づいた、というお話です。

ぼくの心にのこったのは、てんごくにいくときのかっこうです。それは、とてもたくさんの持ち物があっておどろいたからです。とくにおどろいたのは、よみかけのほんで、ぼくが持つとしたら、ずっと気に入っていたおもちゃにします。小さいころを思い出していつでも楽しい気分になれると思ったからです。おじいちゃんがしんでも読みたい本、どんなかな。すごくおもしろい物語かな、それとも天国のガイドブックかな、などぼくはいろいろ考えてしまいました。

それから、ぼくがかんじたことは、おじいちゃんは、天国のことだけじゃなく、みんなのことを見まもりたいし、楽しませたいし、おぼえていてほしいと思っていたんだなということです。それは、つくってほしいおはかの形が、みんなが楽しくてついつい来たくなるものばかりだし、みんなをみまもるほうほうも、とくべつじゃなくて気がつくと近くにあるものにへんしんだし、みんなが楽しくなれるきねんひんを作ってほしいと書いていたことからわかりました。

ぼくは、この本を読んで母とたくさん話しました。たとえば、天国に行く時、何を持って行くか、どんなかみ様にいてほしいか、天国がどんなんだったらいいか、何がしたいか。生まれかわるとしたら何になりたいか。ここで気づいたことがありました。ぼくは、生まれかわったら、アレルギーの出ないこまった顔のネコちゃんになりたいと思いました。どうしてかと言うと、みんなにあいされたいし、アレルギーが出ないとお姉ちゃんにずっとかわいがられていっしょにいられると思ったからです。ぼくもおじいちゃんといっしょで、しんでからのことを考えていたら、家族がこいしくなってしまったのです。おじいちゃんがしぬとき、さびしかったのか、楽しみだったのかわかりませんが、このノートを書いている時は、きっとぼくのように家族がこいしくなったにちがいないと思いました。

「ぼく」はノートを読んで「いきているあいだはどうしちゃおう」ノートを書くことにしました。おじいちゃんのノートは、今、生きていることの大切さも教えてくれたんだと思います。ぼくも家族と、今生きることを大切にしないといけないなととても思いました。

対象図書　「このあとどうしちゃおう」　ヨシタケ　シンスケ・著　ブロンズ新社

北海教育評論社賞

蟹工船を読んで

札幌聖心女子学院高等学校　二年　竹内　萌乃

今まで文学にまったく興味を示さなかった私が高校生になって明治・大正時代が好きになりその時代の文学を読み始めた頃、「プロレタリア文学」という言葉を知り、いったいどのような物語なのだろうと思いその中でも有名な小林多喜二の蟹工船を読んでみました。

この本は、蟹工船というかにを缶詰に加工する船での話です。労働者たちがだまされるようなかたちでこの蟹工船に集められ、死者も出るような過酷な労働条件のなか最後にはリーダーを失うも資本家たちに抵抗する姿が描かれていました。

この本を読んでみて本当に驚きが頭を埋め尽くしました。私は明治・大正時代の書物で生活している姿に憧れをもっており、毎日のように「明治に行きたい。」や「大正時代に生まれたかった。」などと言っていました。そんな中この本を読んでガツンと頭を殴られたような気分でした。当時の労働が事細かく描かれており、読んでいくうちにあたかも映像を見ているかのような感覚に陥りました。格差社会であったということはわずかながらも理解していたが、まさかここまでの差が生じていたという事実を知らなかったからです。当時のブルジョアとプロレタリアとの大きな隔たりを突き付けられた気がしました。今まで軽々しく「この時代に行きたい」と言っていた自分を殴りたくなりました。当時、死と隣り合わせで必死に生きていた人の苦労も知らずに自分は何と愚かなことを言っていたのだろうととても後悔しました。それと同時に、この蟹工船というものは環境こそ違うにしろ現代で言う過労死や、残業代の出ない時間外労働に似ているのではないかと私は思いました。資本家と現代の会社の上司がイコールで、労働者と現代の社員がイコールで結ばれるのではないかと私は考えます。蟹工船の中の男たちは騙されるかたちで船にのることになりますが、現代の日本は違います。自ら入りたいと思った会社で時間外労働を強制的にやらされるのです。どちらの方が苦痛でしょうか。私は後者だと考えます。なぜなら、自ら入社したいという気持ちで入るためもらった仕事はしっかりこなしたいと考えるはずです。その純粋な気持ちに付け込んで無理な仕事を押し付けてくるというのは、蟹工船での労働よりもひどいものなのではないのでしょうか。もちろん物理的暴力と精神的暴力、どちらが辛いかという問いに対しては千差万別の答えが返ってくると思います。しかし私は現代の方が極めて悪質だと考えます。蟹工船の中の男たちは資本家に対して同じような思いを抱えた人が集まっていましたが、現代はどうでしょうか。一人の特定の人に多くの仕事を任せすぎてはいませんか。人は誰かがいるとその人のために頑張ったり、協力したりしませんか。ある人を孤独にするというものは見えない暴力であり、その力は見えない分受け手により大小さまざまに力を変えていると私は考えます。そしてこれが、現代の方が悪質であると考える理由です。

小林多喜二は自分の命をかけてでも当時の劣悪な労働状態を書き残したのにもかかわらず、もう一度歴史をくり返す日本の労働状況に私は苛立ちを覚えました。もちろん多喜二は自分の本が二十一世紀まで残り、もう一度繰り返さないために書き残したつもりで書いたわけではないのかもしれません。しかし、現代ではプロレタリア文学を代表する作品になり、ましてや廃れることなく受け継がれているのです。にも拘わらず多喜二が警察に虐殺されてまで残した文学を読まずに歴史を繰り返すのですか。今の高校生はなかなかこのような五十年以上も前の作品を読む人はほとんどいないのかもしれません。ましてや大人でも読んだことのない人は多いと思います。しかし、この本だけは心の底からより多くの人に読んでいただきたい本です。この本を読んだらきっと多くの日本人は今の自分の生活、三食きちんとした食事ができること、蒲団で寝ることができる有り難さに改めて気づくことができるはずです。また、現在でも問題となっている貧困層との格差、難民やその状況に近い生活を送っている人がいるということに目を向けるきっかけになるのではないのでしょうか。

私はこの本から本当に多くのことを学び、また深く考えることができました。多喜二がこの本を通じて伝えたかったこと、検閲が厳しい時代だったのにも関わらず当時のリアルな労働状況を書き出版したということを考えると、私たちはこの本を読み、現代の労働状況について見直し且つ今後よりよい方向に行くように改めなくてはいけないのだと思いました。まるでリーダーを失った労働者たちの抵抗のように。

「蟹工船」　小林　多喜二　著　理論社

図書館ネットワークサービス賞

レシピは残る

札幌市立宮の森小学校　五年　松田　莉奈

朝起きると、台所から「ジュージュー」とベーコンを焼いている音とともに、料理のおいしい匂いがただよってくる。おいしい料理を食べる時、人はとても幸せになる。季節の行事、お祝い事にも料理はかかせない。

主人公の昇兵さんは、「脊髄小脳変性病」という病気で、体の機能がだんだん失われていく。彼の夢は、料理人だった。

私も昇兵さんと同じく、オリジナルレシピノートを書きとめている。この本を読んでみようと思ったのは、題にひかれたからだ。

昇兵さんは、発病するまでは将来への不安もなく、料理を作っていたんだと思う。発病してからは、たくさんの不安があったことだろう。今まで出来たことが出来なくなったり、ねたきりのお母さんのように日々悪くなっていくのが、さぞこわかっただろう。それにねたきりになったお母さんのお世話は、本当に大変だったと思う。

数年前、脳こうそくになって亡くなったひいおばあちゃんのことを思い出した。食事やトイレのお世話、とこずれにならないように体位交換など、身動きが出来ないので、お世話が必要だった。昇兵さんのお母さんも、同じくお世話をしてもらっていたのだろう。考える事や感じる事が正常にできるのに、体を動かすことだけでなく、自分の想いも伝えられない事は、悲しく辛いことだ。

発病した昇兵さんは、高校も中退し、心を閉ざし引きこもった。私ならどうしただろう。私も昇兵さんのように、人に会いたくなく、心を閉ざしていたかもしれない。だが、数年後には動けなくなったり、想いも伝えられなくなることを知っていたら、動けるうちにたくさんの友達と遊んだり、話し合ったりしたいと思う。

心を閉ざした昇兵さんに、人生を変える出会いがあった。五十嵐さんの他、チーム紅蓮の仲間たちとの出会いだった。昇兵さんの生きがいだった料理。火傷をして医師に、火を使うことを禁止されたが、料理をあきらめることはなかった。火を使わない電子レンジなどで料理を作ることを思いつき、これまでにたくさんのレシピを作ってきた。こうした活動は、仲間に支えられていたから続けることができた。体が不自由になってもレシピを考える事で社会とつながっている。

私は、ネットで昇兵さんの「かっぺキッチン」を検さくして、実際に料理を作ってみた。作ってみると簡単にできた。材料も手に入りやすい。食べた時「おいしい。」昇兵さんの気持ちが、「グッ」と伝わってきた。

人は、色々な人に支えられている。そして、皆の力が集まることによって、社会の役に立つ事ができる。「レシピは残る」昇兵さんのレシピは生きたあかしである。そして、これからも皆の力で「かっぺキッチン」を続けてほしいと思う。今の私は、まだ何が出来るか分からないが、今まで出会った人たちとの絆を大切にしていきたい。

対象図書「レシピにたくした料理人の夢　―難病で火を使えない少年―」
百瀬　しのぶ・著　汐文社

図書館ネットワークサービス賞

人間だけじゃない

藤女子中学校　一年　塚本　麻衣

「事実は小説や映画よりもずっと過酷。」

被災した飼い主さんたちは、口をそろえてこういうのだ。

私はこの本に出会うまで気づかなかったことがある。それは、東日本大震災で被災したのは人間だけではないということだ。当時のニュースで取り上げられたのは人々のこと。みな「たくさんの人々が――。」という。だがちがう。人間と同じぐらいこの日本にいる、共に暮らしている動物たちを忘れてはいけない。

この写真集『待っている犬』には、たくさんの人々の活動の記録がのっている。被災後の犬や猫、飼い主さんへの支援。全国から届いた、たくさんのあたたかい支援のありがたみなど。そして、震災がどんなに恐ろしいものだったのか。すべてがこの一冊につまっている。

私は震災のことをあえて写真集として表したことに疑問をもった。書いていた訳ではないが、なんとなくわかった。写真にすることでたくさんの人に、悲しい現実を知ってもらいたかったからであろう。あの日に見た、あの光景を私たちに写真集として伝えてくれているのである。

震災時、私は幼稚園の年長だった。こんなにも大変で、悲しい出来事だとは思いもしなかった。今私は中学一年になり、震災から六年が過ぎていた。私は当時の事はあまり覚えていなく、正直昔のことだと感じ始めていた。だが、この本を読み自分の間違いに気づいた。もう六年もの前の話なのではなく、「まだ六年しかたっていない」ということだ。そんな私のように「もう過去のこと。」そう感じ始めている人は多いと思う。だから、この本を通して知ってほしい。考えてほしい。報道されている被災地の復旧・復興は、ほんの一部にすぎないこと。精神的・身体的・経済的被害のこと。そして何よりも、家族として愛された動物たちのことを。

東日本大震災は、三月とはいえ、まだ雪の降る寒い冬のことだった。被災後すぐに犬や猫の保護活動を行うドックウッドやボランティアの方々の話。活動してわかったことがある。それは、震災の中でも変わらない、強い愛情と絆。

ほとんどの避難所で、動物は同居できない。飲み水も食べ物もない。ほんの少しの配給の水。自分の水を分け与えるつもりでも、「犬に飲ませるなら渡せない。」と言われる。そんな日が何日も続く。だが飼い主さんは動物を家族として、見捨てる事はできなかった。何も持たずに愛犬だけを炊き抱え、そのまま津波にのまれ流された少女。地震直後、愛犬が心配で自宅に戻る途中、津波で命を落とした母親。置いて避難するくらいなら愛犬といっしょに死んでもいいと、動かない父親。動物たちは飼い主にとって「家の一員」、そんな言葉だけでは語れないほどの、大切な存在。それはこんな非常事態の中でも変わらないのだ。私はすごく心をうばわれた。私だったらと考えて、飼い主さんの愛情と強さに感動した。

愛情は飼い主さんだけではなく、動物たちもそうだ。待っている犬たち。避難所の外で寒さにたえながら身をよせあう犬。車の中で十日間を過ごしていた犬。震災から一週間が過ぎても飼い主を探して走り続ける犬。倒壊した家をリードもつながっていないはずなのに守り続ける犬など。動物たちからもたくさんの愛情が伝わってきた。

ドックウッドのスタッフ、ボランティアの方々は震災直後から今も被災した動物たちの支援をしている。被災した現場を歩き回り、保護をした。避難所も周り、大切な家族をお預かりした。彼らに迷いはなかった。

物流がストップしているにもかかわらず、大型のトラックで届けられた大量のペット用支援物資。心温まる応援メッセージも寄せられていた。保護した動物たちはケアを行い、飼い主を探した。飼い主との面会で元気を取り戻す猫。新しい生活が始まる犬。この本で探している愛犬と再会できる、そんなきっかけになれば、というメッセージもたくさんのこの一冊にこめられている。

この本と出会って私の考えは変わった。東日本大震災の恐ろしさを知るだけではいけないのだ。大切なのは震災から、これからのことを考えるということだ。私も本を読んで震災も、それよりも後が大変だということがわかった。

この本の著者、ドックウッドの方々は活動を振り返り「本当に良かった」といっている、お金やボランティア不足の中で活動し続けて、それが少し実っていることによろこびを感じていた。私もこの方々のように、どんな事態でも助け合うことを忘れずに過ごしたい。

みなさんにもこの本で震災のことを知るきっかけになってほしい。私はこの本に出会って本当に、良かった・そして、「人間だけじゃない」ことを知った。

「待っている犬」　ドックウッド　著　角川書店

光村図書出版賞

傍観者の苦悩

北嶺中学校　三年　山口　泰輝

冬のはじめのバスの車内で、主人公は、外国兵たちとトラブルを起こしてしまう。外国兵たちは主人公の衣服を強引に脱がし、他の数名の乗客たちにも衣服を脱がさせる。主人公は、下半身を剥きだして背を屈めた自分たちを「羊」と認識する。外国兵たちがバスを出て行った後、「羊」にされた人間たちは疲れ果て、座席に座った。傍観していた人間たちが話しかけても、「羊」にされた人間たちは言葉を発することができなかった。

この作品、「人間の羊」は、大江健三郎の、芥川賞受賞当時の作品で、被害者の、傍観者に多雨する、やるせない感情を描いた作品である。

「人間の羊」には、生々しい表現の文章がところどころに見られる。例えば、「甲虫の体液のように白い涙」、「水に濡れた裸の鳥の身悶え」などだ。また、登場人物の心情の描写においても、たとえを用いた文章が多い。例えば、傍観していた人間たちが、「羊」にされた主人公たちに発言しているシーンでは、主人公の心情を、「躰の底ふかく、屈辱が鉛のように重くかたまって」と表現している。他には、主人公がバスを出た時に、主人公と同じく「羊」にされた人間をバスの窓越しに見て、ふと浮かんだ心情を、「肉親と別れるような動揺」と表現している。これらの表現により、主人公の些細な感情の動きを、はっきりと感じ取ることができた。

僕がこの「人間の羊」を読んでいる最中に、疑問が生じたところがある。傍観者の中の一人である教員が、他の傍観者たち数名と共に、「羊」にされた人間たちに対して、こう言ったのだ。「黙って耐えていることはいけないと僕は思うんです」、「僕らが黙って見ていたことも非常にいけなかった。」、「恥をかかされたものの、はずかしめを受けた者は、団結しなければいけません。」と。僕は、なぜこの教員はこんな発言をしたのか、と不思議に思った。もしかしたら被害者は事件のことを忘れたいと思っているかもしれないのに、なぜ事件のことを口にしたのか。「非常にいけない」のなら、なぜ外国兵たちを止めずに、黙って傍観していたのか。僕は、教員の発言の意図を考えていくうちに、この教員に対して嫌気がさすのを感じた。事件が起きている最中に、事件に深く関わろうとしなかった者に、事件のことについて語る資格はない、と僕は思ったのだ。

しかし、それと同時に、「そういうもの」なのかもしれない、とも感じた。つまり、人間は、都合の悪い時には逃げようとして、安全だとわかったら行動し、かつ、できるだけ、いい人でありたいと望むものだ、ということに僕は気付いたのだ。

被害者から見れば、ただ傍観しているだけ、という態度は、納得のいくものではないだろう。被害者の痛みが、理不尽な理由によるものであれば、その痛みを知らない者は、憎たらしいはずだ。

しかし、傍観者たちも、悪気があるはずではない。「いじめを見ているだけというのもいじめだ」というが、僕はそれが正解ではないと考えている。僕が傍観者だとしたら、「被害者」と「加害者」二つのうちに含まれなければ、わざわざそれらに入り込もうとすることはないだろう。ラッキーだと思いながら、コソコソと逃げ隠れするかもしれない。それに、被害者が、できるだけ大事にしたくない、と考えている可能性もあるのだ。うかつに入ってはいけない領域だとしたら、傍観者は、ただ黙って見ていることしか、できることはないのだ。加害者は、少なくとも悪意をもって被害者を傷つけるが、傍観者に悪意はないのだ。

見ているだけではダメだというのなら、どうすればいいのだろうか。被害者と共に傷つく？被害者に代わって、加害者に仕返しをする？それらが根本的な解決につながるとは到底思えない。

この問題について、僕はひとつの答えをだした。被害者に、自分は敵ではないことを伝える。それだけで、被害者は救われた気持ちになるのかもしれない。共に戦うことを拒まれたら、ただ、見ているだけでいいのだ。

だが、それが完全な解答ではないかもしれない。もしくは正解など、はじめから存在しないのかもしれない。

作中では、被害者が主人公だったから、被害者側の気持ちが伝わってきた。こうして、その立場になって考えてみる、ということに改めて実感した。

これから、僕が生きていく上で、人間関係のトラブルとは、何度も直面するのだろう。そんな時には一人一人の気持ちに寄り添いたい、そう強く思った。

「死者の奢り・飼育」　大江　健三郎　著　新潮文庫

◇高等学校の部

自　由	・願いの行方	札幌光星高	1年	加藤　ひより
	・「生きる」意味	札幌旭丘高	1年	小島　響楓
	・七夜物語の世界を冒険して	札幌聖心女子学院高	1年	佐藤　百華
	・容疑者ｘの献身という本に出会って	札幌啓成高	1年	夏堀　愛
	・「風葬の教室」を読んで	札幌啓成高	1年	疋田　瑞季
	・「歌行燈」を読み感じた泉鏡花の魅力	札幌旭丘高	1年	宮本　果恵
課　題	・僕も歩もう一歩ずつ一祖父の情熱を胸に一	北海高	1年	小西　海翔
自　由	・見た目での差別	札幌聖心女子学院高	2年	菊池　優花
	・信仰の心理一私の中のギチジローー	札幌聖心女子学院高	2年	瀧田　小麦

佳　作

◇小学校の部　低学年

自　由	・アイスクリームがふってきた	北野台小	1年	小林　勇斗
課　題	・アランのははでっかいぞ、こわーいぞを読んで	北野台小	1年	青山　桃菜
指　定	・ソーニャとぼくがないた	教育大付属小	1年	加藤　暖翔
自　由	・コールテンくんへ	新川小	2年	小笠原　七海
	・まくらのせんにん	北野台小	2年	金子　柊
課　題	・なにがあってもずっといっしょを読んで	澄川西小	2年	井手野　采
	・分かり合えれば世界は広がる	北九条小	2年	奥　啓仁
	・アランの歯はでっかいぞ、こわーいぞ	福住小	2年	長内　航平
指　定	・いのちをうけつぐ	福住小	2年	岩本　亜澄
	・だいじないのちをまもる	北白石小	2年	堤　十和

◇小学校の部　中学年

自　由	・モタラへのお手紙	大谷地小	3年	齊川　万結
課　題	・転んでも大丈夫	本郷小	3年	長谷　知美
自　由	・大きくなるぞ	真駒内桜山小	4年	菅原　大輔
	・『うちはお人形の修理屋さん』を読んで	桑園小	4年	宮崎　ほのか
指　定	・「やればできる」アンズが教えてくれたもの	北野台小	4年	渋谷　結愛

◇小学校の部　高学年

自　由	・「銀杏堂」を読んで	日新小	5年	熊田　蓮
課　題	・チキン！	桑園小	5年	荒川　百彩
自　由	・凛花から教わった事	川北小	6年	柴田　麗華
	・リヤカーマンから教わったこと	真駒内桜山小	6年	菅原　健太郎
	・強い心と正直な気持ち	もみじの丘小	6年	鈴木　健太
課　題	・臼井二美男さんの仕事	新琴似南小	6年	池田　栞
	・義足に血が通う日	新琴似小	6年	二階堂　桜子
	・「転んでも、大丈夫」を読んで	円山小	6年	畠山　若菜

◇中学校の部

自　由	・一人じゃない	向陵中	1年	岩本　みなみ
	・「夜間中学へようこそ」を読んで	宮の森中	1年	大住　千尋
	・大切なもの	向陵中	1年	相方　彩音
課　題	・挑戦	平岡緑中	1年	小田桐　芽衣
	・自由な発想を忘れない	向陵中	1年	松山　玲子
指　定	・強い信念を持って	向陵中	1年	渡邊　光麗
自　由	・人間の力	藤女子中	2年	浅沼　千文
	・「天国までの４９日間」を読んで	もみじ台中	2年	遠藤　玲奈
	・「天才」とその生き様	藤女子中	2年	鳴海　花
	・笑顔	藤女子中	2年	山崎　芽生
	・虹色のチョーク	向陵中	3年	武部　創真
	・「仲間」になるため	向陵中	3年	堀　柊介
指　定	・命がけの伝承	向陵中	3年	金子　拓磨

優　良　賞

◇小学校の部　低学年

課　題	・「なにがあってもずっといっしょ」を読んで	桑園小	1年	上西　ゆりあ
自　由	・リリコちゃん大すき	厚別西小	2年	坂本　温音
自　由	・セミのくらし	ひばりが丘小	2年	瀬川　凛久

◇小学校の部　中学年

自　由	・「チェロの木」を読んで	新光小	3年	佐藤　奈央
課　題	・アジアのなか間	新光小	3年	梅津　巴奈
課　題	・わたしにできること	ひばりが丘小	3年	三木　玲那

◇小学校の部　高学年

自　由	・天国の日野原先生へ	教育大附属小	5年	亀山　寧々
課　題	・ぼくたちのリアル	大谷地小	5年	原田　葵
自　由	・私の一歩	桑園小	6年	梅澤　衣咲

◇中学校の部

自　由	・小さな地球から無限の宇宙へ～私の未来図	簾舞中	1年	伊田　紗雪
	・死と向き合うこと	藤女子中	2年	佐々木　亜美
	・とむらいと生	藤女子中	2年	西　桃花
	・「死」と「いのち」と向き合うということ	宮の丘中	2年	牧野　桜
	・「博士が愛した数式」を読んで	北嶺中	3年	梅村　拓人
	・芥川龍之介「蜘蛛の糸」を読んで	新川中	3年	小山内　里佳
	・心情の変化	向陵中	3年	藤澤　菫
	・晴れたらいいね	向陵中	3年	三好　芙美花
課　題	・ホイッパーウィル川の伝説を読んで	向陵中	3年	稲木　理紗

◇高等学校の部

自　由	・永遠の“0”	札幌啓成高	1年	加戸　南実
	・一人きりの家族	札幌光星高	1年	菅　浩輔
	・自分と向き合う	札幌光星高	2年	今井　優花
	・私にできること	札幌光星高	2年	土井　千絵

第６３回　札幌市読書感想文コンクール
入賞者一覧

平成２９年度

札幌市長賞	札幌聖心女子学院高等学校　２年	自由	「人間」と「宗教」の関わり	大久保　絵未
札幌市議会議長賞	札幌市立山の手小学校　６年	自由	テオの「ありがとう」ノート	野崎　幸子
札幌市教育長賞	北嶺中学校　２年	課題	僕の「何か」を探したい	芝木　美昭
札幌市学校図書館協議会会長賞１	札幌市立桑園小学校　４年	自由	あきらめない強さ	岡七　海
札幌市学校図書館協議会会長賞２	札幌市立新川中学校　３年	自由	イリュージョンでできた世界	佐藤　亮太
札幌市学校図書館協議会会長賞３	北海道札幌旭丘高等学校　１年	自由	私の「幸せ」とあなたの「幸せ」	和田　朋夏
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞１	札幌市立真駒内桜山小学校　２年	自由	みんなのおひさまはらっぱ	貸谷　珠音
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞２	藤女子中学校　２年	自由	親友	梶原　捺
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞３	北海道札幌旭丘高等学校　１年	自由	美しいこと	佐藤　美安
北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞	北海道札幌旭丘高等学校　１年	自由	九十歳。何がめでたい。	作田　明佳里
光陽社賞	札幌市立新琴似南小学校　１年	課題	アランのははでっかいぞ、こわーいぞを読んで	上野　晴南
キハラ賞	札幌市立西陵中学校　１年	自由	『光のうつしえ』を読んで	安住　佳穂
教育出版賞	札幌市立美香保小学校　３年	指定	「このあとどうしちゃお」を読んで	土肥　顕仁
北海教育評論社賞	札幌聖心女子学院高等学校　２年	自由	蟹工船を読んで	竹内　萌乃
図書館ネットワークサービス賞１	札幌市立宮の森小学校　５年	指定	レシピは残る	松田　莉奈
図書館ネットワークサービス賞２	藤女子中学校　１年	自由	人間だけじゃない	塚本　麻衣
光村図書出版賞	北嶺中学校　３年	自由	傍観者の苦悩	山口　泰輝

学校賞

毎日新聞社賞	小学校	該当校なし
	中学校	藤女子中学校
	高等学校	該当校なし